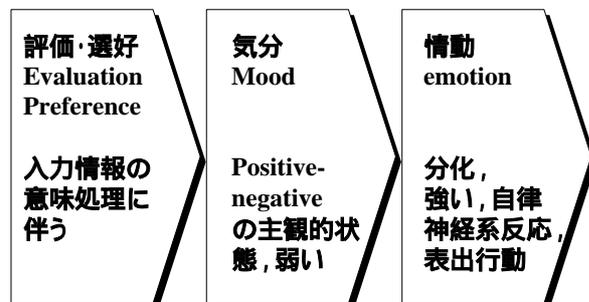


感情と文化的知識

認知心理学概論II 楠見

1. 感情の認知過程と機能
2. 感情認知を支える知識と言語
3. 感情と文化
4. まとめ:感情言語と適応

1 感情(affect)の認知過程と機能



1.1. 評価・選好の機能

a. 評価・選好の機能

入力情報の意味処理に伴う統合的判断, 感性
ムードの形成

- 感情ヒューリスティック
- 単純接触効果 (広告心理)

1.2 ムードの機能

- 正負の主観的状態、弱い 認知活動を方向づけ
気分一致効果, 状態依存性記憶
気分に基づくヒューリスティック
- Positiveムード 安全な環境
ヒューリスティックス利用による単純な情報処理 新たな連合, カテゴリの形成, 創造的処理
- Negativeムード リスク環境
分析的処理, 詳細で正確なバイアスの少ない処理
depressive realism

気分と記憶

気分一致効果(Bower & Forgas, 2000)

想起時または記銘時の気分と一致した出来事
や材料の記憶の方が, 不一致の記憶よりも想起・記銘しやすい

状態依存性記憶 State dependent memory

符号化時と検索時の気分 (心理状態) が一致したときに, 検索成績高い. 文脈効果の一種

- 気分依存した記憶 (躁鬱, 多重人格)
- 薬物依存した記憶

ムードと認知処理

- Positiveムード 安全な環境
ヒューリスティックス利用による単純な情報処理 新たな連合, カテゴリの形成, 創造的処理
- Negativeムード リスク環境
分析的処理, 詳細で正確なバイアスの少ない処理
depressive realism

1.3 情動の機能

- 情動の機能 正負よりも分化,強い
場面集中的処理—注意の増加
割り込み処理
- 行動制御—外界への適応(認知 感情 行動)
敵 危険 恐怖 逃走
障害 妨害 怒り 攻撃
- 内部制御
感情焦点制御—負の感情の発散,抑圧
認知焦点制御—信念の変更
自己防衛機制(精神分析 (Freud,Bowlby))
 - 情報の防衛的排除,逃避,合理化,抑圧

PTSD (Post Traumatic Stress Disorder)

心的外傷後ストレス障害

- 外傷体験後の不安障害の一種
 - フラッシュバック = 過去の体験が,急に,あたかも再体験するように想起

Flashbulb memory 閃光記憶

- 劇的で感情を喚起するような重要な出来事に関する非常に鮮明、詳細で時間的変容のない長期記憶
- 出来事あるいはニュースを聞いた時の状況(場所、時、相手、そのときの活動等)に関する記憶
- Now print mechanism vs リハーサル反復

フラッシュバルブ記憶は加齢によって低下するのか 東海村原子力事故に関する周辺住民の記憶 楠見 孝¹・大谷 肇^{2*}・松田 憲¹ (教心,2000)

フラッシュバルブ記憶(FBM)

- 重大な出来事に遭遇したときの詳細記憶
遭遇時の驚きが強い影響を及ぼす写真モデル (Brown & Kulik,1977)
- 感情やリハーサルの影響も含めた統合モデル (Fikennauer, et al, 1998).
- 高齢者が若年者に比べて, FBM保持者が少ない (Cohen et al,1994)
- 本研究 生命に関わる重大事故に関するFBMが,加齢によって低下するのかを検討.

方 法

協力者 第1調査は206名,第2調査は139名の協力を得た. 両調査とも回答した者が分析対象
内訳は東海村周辺住民61名(平均年齢 47.1歳), 常磐大学生35名(20.8歳). 関西地区大学生・大学関係者43名(22.9歳).

調査時期 1999年9月30日のJCO原子力事故の翌月の10月と1年後の2000年10月に実施.

手続き 質問紙法による郵送調査

FBM質問紙(FMQ) Cohen et al(1994)を参考にして, 41項目の質問紙を作成した. 記憶内容の記述, 確信度, 重要度, 感情(以上9段階), リハーサル回数(6段階)などの評定を求めた.

鬱や不安と認知

- 鬱患者は否定的な自己スキーマを複数もつ (Beck)
 - 自己参照課題において否定項目の再生多い
 - 曖昧情報に対して, 否定的解釈
- 不安症患者は脅威刺激に(前)注意処理
 - 曖昧刺激に対して脅威解釈(認知的な傷つきやすさ)

認知療法

- ・ 軽症鬱病の治療するための短期精神療法(Beck,1976)
 - ・ 歪んだ認知を自らモニターして変えるようにする 望ましい行動が現れる
- 1.クライアントの(悲観的)認知(思考パターン, 仮説的スキーマ)の解明
 - 2.クライアントが非現実的な(悲観的)認知を修正できるように支援(行動療法)

認知心理学的な感情研究の視点

- ・ 感情,生理的状态は無意識レベルで"自動的"処理 評価結果が意識化可能
- ・ 認知的反応 感情反応
- ・ A Iの感情研究感情のプロダクションシステム(Pfeifer,1982)

2 感情認知を支える知識と言語

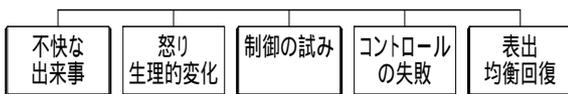
- ・ 基本感情 喜,恐,怒,哀,驚,幸福
自動的反応パターン,顔筋との関連,文化的共通性
- ・ 基本次元 (Schlosberg)
快-不快,
覚醒-睡眠
緊張-弛緩

常識的知識

- ・ 心の中の感情の動きに関する素人理論, 自他の行動理解を支える
- ・ 出来事スキーマ,スクリプト,シナリオ
 - ANGER: 不快な出来事 怒り 統制の試み 統制の喪失 報復
 - LOVE: 探索 発見 感情統制の試み 統制 欠如 身体効果,行動反応 結婚によって充足

感情のプロトタイプシナリオ (e.g.,Lakoff,1987)

怒りのスクリプト



3 感情と文化

スクリプトにおける文化的普遍性

- ・ 感情生起の時間的順序
- ・ 生理的反応パターン

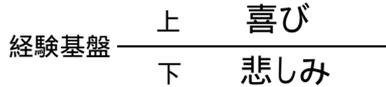
感情スクリプトの文化的特殊性

- ・ 感情を生起させる出来事
- ・ 表示規則
- ・ 制御・報復パターン--感情規範
- ・ 文化的感情事象(例:甘え)

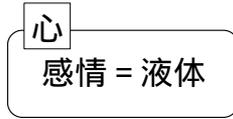
感情言語を支えるイメージスキーマ

- 喜びがこみ上げてくる
- 悲しみに沈む

•垂直性スキーマ



- 容器スキーマ
- バランススキーマ



感情規範

感情に関する行動の適不適の判断基準, 行動を動機づける, 社会文化的に形成され, 共有された信念, 常識

- 例: 恋愛規範 相互排他性, 先取権, 異性愛など

大学生の恋愛規範の分析 (楠見, 1995)

参加者 大学生134名 (男性49名, 女性85名)

質問項目 1. 恋愛規範 5つ規範(楠見, 1995)に対して5件法 (1:反対 5:賛成)で判断を求めた

- N1: 恋愛感情は異性に対して持つべきである
 - N2: すでに他の人とつきあっている人に対しては恋愛感情を持つべきではない
 - N3: 一度に一人に対してだけ恋愛感情を持つべきである
 - N4: 恋愛は重要であるが生活のすべてではない
 - N5: いつも恋をしているべきである
 - N6: 相手に対する恋愛感情がわかなくは結婚できない
- N1 から N5 は社会学者 Simon et al (1992) が会話観察と集団面接で明らかにしたものである

表1 恋愛規範に対する賛否の態度 (%)

恋愛規範 (略称)	男子 (N=186)		女子 (N=168)		χ ² (df=2)
	反対	賛成	反対	賛成	
1. 恋愛は重要ではあるが生活の全てではない	13.4	77.4	8.3	86.9	5.5
2. 恋愛感情は異性に対してだけ持つべきである (同性愛禁止)	25.3	52.2	42.9	25.6	26.5***
3. すでに他の人とつきあっている人に恋愛感情をもつべきではない (先取権尊重)	65.6	19.4	71.4	17.3	1.6
4. 一度に一人に対してだけ恋愛感情をもつべきである (一対一)	49.5	30.1	46.4	35.7	1.3
5. いつも恋をしているべきである	51.1	22.6	36.3	33.3	8.6*
6. 相手に対する恋愛感情が弱かなくては結婚できない (恋愛結婚)	15.6	68.3	16.1	66.7	0.1

愛の文化的モデル

- (a) 社会・文化的に共有されたイメージ, 知識, 素朴理論, 規範を含む (語の辞書的意味, 百科事典的意味以上のものを含む)
 - (b) 単なる知識表象ではなく, 人が出来事を解釈したり, 行動をコントロールする枠組みとして働く (e.g., Holland & Quinn, 1987).
- 愛に関する文化モデル**
- (a) 子供から大人になる過程で獲得する必要がある
 - (b) 思春期以降の男女にとって, 恋愛, 欄に関する文化的モデルは, 行動を方向付ける重要な意味を持つ
 - (c) 社会化や文化的学習によって獲得される (自然概念の学習とは異なり, 情報の利用可能性が社会的に方向付けられたり制限されていることがある)
 - (d) 知識の源泉
 - (i) (マス/パーソナル) コミュニケーション
 - (ii) 観察からの解釈, 推論, 演繹, (iii) 類推
 - (iv) 経験とそこからの帰納 (Strauss & Quinn, 1991)